

平成二十四年六月十日発行  
皇學館論叢第四十五卷第三号  
抜刷

研究ノート

『源氏物語』 六条院に住む女性たち

―花散里と〈夏〉の町をつなぐもの―

葛西恵理

## 『源氏物語』 六条院に住む女性たち

― 花散里と〈夏〉の町をつなぐもの ―

葛 西 恵 理

### □ 要 旨

光源氏の住居六条院には四つの町が建設され、それぞれの町に一人ずつの女主人が配置されている。本稿では、その中でも夏の町と称される場と女主人花散里の関係性について再検討した。

従来、花散里が夏の町に住むことについては、彼女の登場場面や容姿・性格等々の観点から、その必然性が論じられてきた。しかし、①夏の町には花散里以外にも玉鬘が引き取られていること。②玉鬘の母である故夕顔は、六条院の女主人の一人として想定された人物であったことを指摘した上で、本来夏の町の女主人としてあったのは花散里で

はなく故夕顔であり、花散里は、夕顔亡き後、彼女の代役として夏の町に配置されたに過ぎないことを明らかにした。

### □ キーワード

花散里 六条院 夏 夕顔 身代わり

### 一 はじめに

『源氏物語』は、平安時代の文学を代表する作品で、主人公光源氏の華麗で波乱にみちた生涯と、その次の世代である薫・匂宮らの話を書いた五十四帖からなる物語である。物語の中心

になるのはやはり光源氏であり、彼は生涯の中で多くの女性と出会い、彼の周りにはいつも女性の存在があった。彼を取り巻く数々の女性は、その身分も性格も様々であり、それぞれとの経験が彼の人生に影響を与えている。この影響を与えた女性たちの中に今回稿者が注目したい人物が二人いる。花散里と末摘花である。二人は容姿や境遇などがよく似ていると言われ、様々な観点から二人の比較がなされ、論じられてきた。

上坂信男氏は、花散里と末摘花の共通点として、①「容貌醜怪」、②「しかとした後見がない」、③「その人柄の控え目ではあるが、信頼に価する心情の持主」、④「『源氏物語』の少くともある部分では女主人公の座を供せられている」、⑤「とかくの迂回はあつても結局源氏の保護を受けている」という五つの点を挙げている。上坂氏はこのほかに、二人の状況設定も似ていることをふまえ、花散里が末摘花の後身であり、末摘花が担い切れない部分を花散里が担うことによって新しい構想上の役割を負わせる要請が花散里にあつたと述べている。

このように、花散里と末摘花は容姿や性格などの数多くの点において共通する人物であることがわかる。しかし、そうであるからこそ、ある重要な問題が二つ浮上してくることに気づくのである。一つは、なぜ花散里と末摘花は数多くの共通点を持ちながらも、花散里は六条院に住み、末摘花は二条東院に留ま

ることになったのか、という問題である。

二条東院とは、光源氏と関わりを持つ女性たちを人居させることを目的に作られた住居である。

二条の院の東なる宮、院（『故桐壺院』の御処分なりしを、（源氏は）二なく改め作らせたまふ。花散里などやうの心苦しき人々住ませむなど、おぼしあててつくるはせたまふ。

（濡標・3・一六頁）

これらの「心苦しき」女性として選ばれたのが花散里や末摘花たちであった。しかし、この後、光源氏の新居である六条院が完成し、花散里は六条院へ、末摘花は二条東院に留まることになるのである。

この問題について、林田孝和氏は、花散里・末摘花の二人に醜貌という共通点が認められることから、彼女らの醜貌は「異常な霊力」を持つことの証しであり、二人は「降魔の相を持つ〈魔除けの女〉（降魔の女）」として、それぞれ光源氏の住居である六条院や二条東院に住まわされたと述べている。

確かに、花散里と末摘花は、それぞれ六条院・二条東院の〈魔除けの女〉（降魔の女）としての役割を担っていると言えるのかもしれない。ただ、本稿が問題にしたいのは、なぜ、六条院に住まわされたのが他でもない花散里であり、二条東院に住まわされたのが末摘花であったのか。なぜ、その逆ではなかった

のか、という点なのである。

本稿が取り上げるもう一つの問題とは、六条院における花散里の居所に関するものである。先にも述べたように、花散里は、六条院の完成に伴い、そこに移住することになる。ここで考えなければならないのは、その花散里の居住の場として選ばれているのが、なぜ〈夏〉の町であったのか、ということである。

八月にぞ、六条の院造り果ててわたりたまふ。未申の町は、中宮（＝秋好中宮）の御古宮なれば、やがておはしますべし。辰巳は、殿（＝光源氏、並びに紫上）のおはすべき町なり。丑寅は、東の院に住みたまふ対の御方（＝花散里、戌亥の町は、明石の御方とおぼしおきてさせたまへり。

（少女・3・二七三頁）

源氏は、この六条院を建設する際、四つの町に、それぞれ一人ずつ女性を住ませようと考えた。秋の町には秋好中宮を、春の町には源氏が愛する紫上を、冬の町には明石の君を配置した。そして残りの夏の町に配置されたのが、花散里なのであった。なぜ花散里のみが六条院へと移住することになったのか。そして、なぜ六条院における花散里の居場所が〈夏〉の町であったのか。一見、無関係なものに思われるこれら二つの問題は、ある共通する一つの要素のもとにつながることになる。

ならば、その共通する要素とは何なのか。まずは、二つ目の

問題として挙げた、六条院における花散里の居所が、なぜ〈夏〉の町であったのか、その理由について明らかにすることから始めていくこととする。

## 二 六条院〈夏〉の町に相応しい人物とは誰か

花散里は、麗景殿女御の妹君であり、光源氏とは以前より恋人関係にあった。桐壺院が亡くなったことよって生活に困窮していたところを源氏に援助してもらえようになり、後に二条東院に迎え入れられることになる。二条東院へ移り住んでからは、夕霧の世話を源氏より仰せつかる。そしてしばらく二条東院で暮らしたあと、六条院へ移り住むことになる。

さて、なぜ花散里が移り住む場所が〈夏〉の町であったのか。六条院各町の配置について蛭澤隆司氏は、<sup>（注三）</sup>〈季節の理念化〉に基づいて「まず、紫上・前斎宮・明石君が各町（＝引用者注：春・秋・冬）の女君として決まり、残りの一人を花散里巻で夏の象徴で登場した花散里をあてることにした」とする。つまり、花散里が〈夏〉の町に決定した最大の理由は、彼女が〈夏〉という季節と深い関係にあるという一点に起因していたということである。<sup>（注四）</sup>

確かに、蛭澤氏の指摘にあるように、花散里は〈夏〉と深い

『源氏物語』六条院に住む女性たち―花散里と〈夏〉の町をつなぐもの―（葛西）

関係にある女性であった。

御おとうとの三の君（『花散里』、内裏わたりにてはかなうほのめきたまひし名残の、（源氏の）例の御心なれば、さすがに忘れも果てたまはず、わざともてなしたまはぬに、人の御心をのみ尽くし果てたまふべかめるをも、このころ残ることなくおぼし乱るる世のあはれのくさはひには、思ひ出でたまふには、忍びがたくて、五月雨の空めづらしく晴れたる雲間にわたりたまふ。

（花散里・2・一九三頁）

これは、花散里が初めて登場する場面である。五月雨がめずらしくやんだ、ある日のこと、源氏は、以前より恋人関係にあった麗景殿女御の妹君である花散里のもとに向う。このように花散里は、『夏』のイメージを強く持った女性であったということと自体は間違いないだろう。ただ、疑問に思われるのは、六条院の『夏』の町は、花散里のみに与えられた場ではなかったということなのである。

『夏』の町には、もう一人の女性に移り住んでいる。その女性とは、玉鬘である。

玉鬘とは、今は亡き夕顔の娘である。彼女は、夕顔と頭中将との間にできた子供であったが、その後夕顔と姿をくらませて以来頭中将と会わないままであった。夕顔が亡くなつてのちは

光源氏に引き取られるまで筑紫でひっそりと暮らしていた。源氏に引き取られてからは内大臣（『以前の頭中将』）に本当のことを言わず源氏の娘として成長し、裳着を機に内大臣に真実を打ち明け、やがて髭黒と結婚して源氏のもとを離れていくまで大事に育てられた。ここで、消息がわかった玉鬘を源氏が養女として六条院に迎え入れることとなった。その迎え入れる場所として選ばれたのが、既に花散里が移り住んでいた『夏』の町であった。

大臣（『源氏』、東の御方（『花散里』）に（玉鬘の世話を）聞こえつけたてまつりたまふ。（玉鬘・3・三一九頁）

こうして六条院の『夏』の町には、花散里と玉鬘という二人の女性が住むこととなったのである。

なぜ、玉鬘の住む場所として選ばれたのが『夏』の町であったのか。従来、この点について、以下の二つの理由が挙げられている。一つは、六条院の物理的な理由である。

（源氏は六条院の中で、玉鬘が）住みたまふべき御かた御覧するに、（紫上の住む）南の町には、いたづらなる対どもなどもなし、勢ごとに住み満ちたまへば、顕証に人しげくもあるべし、中宮（『秋好中宮』のおはします町は、かやうの人も住みぬべく、のどやかなれど、さてさぶらふ人の列にや聞きなされむ、とおぼして、すこし埋れたれど、（花

散里の住む）丑寅の町の西の対、文殿にてあるを、異方へ移してとおぼす。あひ住みにも、（花散里は）忍びやかにころよくものしたまふ御方なれば、うちかたらひてもありなむとおぼしおきつ。（玉鬘・3・三一七頁）

玉鬘の消息がわかり、六条院に住ませようとしたときにはすでに《夏》の町以外に彼女に充てる部屋がなかったのである。仮に、他の町に移したところで、彼女自身の扱いが中宮付きの女房並になってしまう。源氏は、そのことを危惧し、彼女を《夏》の町に住まわせることに決めたのである。

玉鬘が《夏》の町に住むことになるもう一つの理由は、《夏》の町に住んでいた花散里の人柄にある。

花散里は、二条東院在住のころ、夕霧養育を源氏より依頼され母親代わりとして世話をしていた。上坂氏はこの点について、「夕霧の継母役を務めてくれる女性としての資格の重要な一項目として、疑うことを知らぬ人、それでいて「女し」く「なつかし」き人ということを作者は考えていたのだろう」として、この要素に該当する花散里が夕霧の養育に適切な女性として設定されたと述べている。

ここから、花散里の性質が世話役に適していると考えられ、玉鬘に対しても夕霧同様に世話をさせるのが良いとされたのである。

（源氏）「母も亡くなりけり。中将（≡夕霧）を聞こえつけたるに、あしくやはある。同じごと（玉鬘の）後見たまへ。山がつめきて生ひ出でたれば、鄙びたること多からむ。さるべく、ことに触れて教へたまへ」

（玉鬘・3・三一九頁）  
これは玉鬘の世話を依頼するにあたり、夕霧の世話が上々であるので今回も同じように世話をしてほしいと言っている源氏の言葉である。この用例からもわかるように、花散里の世話役には定評があり、得意と考えられていた。

こうして源氏は、六条院の物理的な理由、また、すでに夕霧の世話役として実績がある花散里の人柄という理由から、玉鬘を《夏》の町に住まわせることに決めたのである。しかし、やはりまだ腑に落ちない点がある。確かに、源氏が花散里を玉鬘の世話役にしように考えた、その理屈自体は理解できる。ただ、それ以前に、そもそも花散里はなぜ六条院に住むことになったのだろうか。

花散里は、六条院に住む他の女性とは、明らかに異質な存在であった。なぜなら、花散里はこの時、既に源氏とは表向きの夫婦関係になっていたからである。

彼女の人柄は簡単に表すと、おっとりした優しい女性である。気立ても良く源氏を安心させているのだが、彼女は容貌が

『源氏物語』六条院に住む女性たち―花散里と《夏》の町をつなぐもの―（葛西）

あまり優れないことで知られている。

①（花散里は）もとよりすぐれざりける御容貌の、ややさだ過ぎたるこちして、痩せ瘦せに御髪少なるなどが、かくそしらはしきなりけり。  
（少女・3・二六四頁）

②（夕霧が花散里の姿を）ほのかになど見たてまつるにも、容貌のまほならずもおはしけるかな、かかる人をも、人（源氏）は思ひ捨てたまはざりけり、……  
（少女・3・二六三頁）

右の用例からもわかるように、①彼女の容貌は「痩せ瘦せ」であまり良いとは言えず、②後に彼女の世話になる夕霧が、その姿を見たときに「父である源氏はこのような容貌の人でも見捨てずにお世話なされたのか」と思っているほどであった。そして、二人の六条院での夫婦生活については、

（源氏と花散里は）今はただおほかたの御むつびにて、御座なども異々にて大殿籠る。などてかく離れめしぞと、殿（源氏）は苦しがりたまふ。おほかた、何やかやともそばみきこえたまはで、年ごろかくをりふしにつけたる御遊びどもを、人伝に見聞きたまひけるに、今日めづらしかりつることばかりをぞ、この町（夏の町）のおほえきさらしとおぼしたる。  
（蛭・4・七一頁）

とある。源氏と花散里は、必ずしも仲が悪くなったわけではな

い。しかし共寝がなくなってきた、表向きの夫婦仲だと思わざるをえない状態になっていた。この点からしても、花散里が、六条院のほかの女君たちより異質な存在であることは間違いないのである。

それにしても、亡くなった昔の恋人の娘の消息が掴めたただけで、玉鬘をわざわざ六条院に入れるのは疑問である。花散里においても、六条院という源氏の私的後宮にこのような異質な女性をわざわざ移すことは考え難い。むしろ、二人のような境遇の者を住まわせる場所こそが、二条東院ではなかったのか。その中でなぜ、花散里と玉鬘は《夏》の町に呼びよせられたのか。結論から述べる。実は、本来なら二人とも夏の町に迎え入れられるべき存在ではなかったのである。具体的に述べると、彼女たちは、源氏にとって本来《夏》の町に住むべきだったある女君の「身代わり」でしかなかったのである。ではその女君とは一体誰なのか。それは玉鬘の母夕顔である。

### 三 花散里と《夏》の町、そこに関わる夕顔の影

本来、六条院《夏》の町に住むべき女性とは、夕顔であった。そのことは、次の記述から読み取ることができる。

（源氏）「人のうへにてもあまた見しに、いと思はぬなか

も、女といふものの心深きをあまた見聞きしかば、さらに  
すきずきしき心はつかはじとなむ思ひしを、おのづからさ  
るまじきをもあまた見しなかに、あはれとひたぶるにらう  
たきかたは、(夕顔は) またたぐひなくなむ思ひ出でらる  
る。世にあらましかば、北の町にものする人(『明石の上  
のなみには、などか見ざらまし。人のありさま、とりどり  
になむありける。(夕顔は) かどかどしう、をかしき筋な  
どはおくれたりしかども、あてはかにらうたくもありしか  
な」

(玉鬘・3・三一七頁)

これは、玉鬘の消息がわかり、六条院に引き取ることになった  
時の源氏の言葉である。夕顔を忘れられずにいる源氏は、傍線  
部にあるように、もし夕顔が生きていたら明石の上にも劣らな  
いような処遇でお世話していただろうと話している。ここでの  
「明石の上に劣らないような処遇」には、夕顔を六条院に住ま  
わせるといったことも含まれているに違いない。さらに重要な  
のは、もし仮に夕顔が生きていた場合、六条院に住むべき場所  
として考えられるのは、〈夏〉の町以外に存在しないというこ  
となのである。

では、ここで、源氏と夕顔の関係について確認していくこと  
とする。

夕顔は「常夏の女」として帚木巻に初めて登場し、夕顔巻で

源氏と出会う。夕顔は、源氏が見舞いに行く途中に見つ  
けた夕顔の花を御隨身に摘ませた際に、童より歌の書いてある  
扇を渡され、この歌の作者に興味を持った源氏が、惟光に調べ  
させて出会った女性である。

(源氏)「くちをしの花の契りや。一ふさ折りて参れ」と  
のたまへば、(隨身は) この押しあげたる門に入りて折る。  
さすがにされたる遣戸口に、黄なる生絹の単袴、長く着な  
したる童の、をかしげなる、出で来て、(隨身を) うち招く。  
白き扇の、いたうこがしたるを、(童)「これに置きて参ら  
せよ。枝もなさげなめる花を」とて、取らせたれば、  
門あけて惟光の朝臣出で来たるして、奉らす。

(夕顔・1・一二二頁)

これは、乳母を見舞いに行った源氏がその隣の家にある夕顔の  
花を見つけて隨身に持つてくるように命じた際の場面である。  
ここに描かれる「夕顔」の花、そして童の着ている「黄なる生  
絹の単袴」から、季節は〈夏〉であることが窺える。これらの  
点から、夕顔は〈夏〉に深く関係する人物であったことがわかる。  
しかし、夕顔は、源氏と結ばれてまもなく死んでしまう。夕  
顔は、性格はおっとりして子供っぽく、かわいらしいのだが、  
家があり高貴ではなく、それどころか身元が知れないという  
謎の女性であった。光源氏はその夕顔に次第に惹かれていき、

『源氏物語』六条院に住む女性たち―花散里と〈夏〉の町をつなぐもの―(葛西)



やがて忘れられない大きな存在になっていったのであるが、あるとき源氏と出かけた某院で物の怪に襲われて悲運の最期をとげることになった。

以上のことから、夕顔が〈夏〉にゆかりの女性であり、その意味においても、彼女が〈夏〉の町に住むにふさわしい人物であったことは明かであろう。このように考えると、なぜ玉鬘が〈夏〉の町に住むことになったのか。その理由はもはや明白だろう。それは、玉鬘が夕顔の娘であったからである。つまり、玉鬘は、夕顔の影を背負う「身代わり」の女性として〈夏〉の町に住むことになったのである。

では、なぜ、花散里は〈夏〉の町に移住することになったのか。実はこの理由も簡単に浮かび上がってくる。六条院完成時において、既に夕顔は亡くなっており、玉鬘も見つけられていない。花散里は、当時、夕顔の「身代わり」としての資格を持つ唯一の女性であり、そのために〈夏〉の町に移住することになったのである。

第二節でも述べたように、花散里を象徴する季節は、夕顔と同じく〈夏〉であった。実は、この二人には、それ以外の面からでも共通点を見出すことができる。

例えば、夕顔と花散里は、内面的にも、多く共通点を持つ女性たちであった。

#### ▼花散里

・ただ、(花散里の)御心さまのおいらかにこめきて、かばかりの宿世なりける身にこそあらめと思ひなしつつ、ありがたきまでうしろやすくのどかにものしたまへば、をりふしの御心おきてなども、こなた(＝紫の上)の御ありさまに劣るけぢめこよなからずもてなしたまひて、あなづりきこゆべうはあらねば、同じごと、人参りつかうまつりて、別当どもも事おこたらず、なかなか乱れたところなく、めやすき御ありさまなり。

(薄雲・3・一五九頁)

・心ばへのかうやうにやはらかならむ人をこそあひ思はめ、と(夕霧は)思ふ。

(少女・3・二六三頁)

#### ▼夕顔

・人(＝夕顔)のけはひ、いとあさましくやはらかにおほどきて、もの深く重きかたはおくれて、ひたぶるに若びたるものから、世をまだ知らぬにもあらず、いとやむごとなきにはあるまじ、いづこにいとかうしもとまる心ぞ、と、(源氏は)かへすがへすおぼす。

(夕顔・1・一三七頁)

・されど、(夕顔は)のどかに、つらきも憂きもかたはraitakiきことも、思ひ入れたるさまならで、わがもてなしありさまは、いとあてはかにこめかしくて、またなくらうがはしき隣の用意なさを、いかなることとも聞き知りたるさま

ならねば、なかなか、恥ぢかかやかむよりは、罪ゆるされ  
てぞ見えける。

(夕顔・1・一四〇頁)

このように、花散里・夕顔は共に「こめかしく」て「やわらか」  
な人物であることがわかる。つまり、これら二人は、〈夏〉と  
いう季節だけでなく、内面的にも共通する人物たちだったので  
ある。

事実、源氏は、玉鬘の世話を依頼するにあたり、花散里に對  
して、次のようなことも述べていた。

(源氏)「かの親なりし人は、心なむ、ありがたきまでよ  
かりし。(花散里の)御心もうしろやすく思ひきこゆれば」  
などのたまふ。

(玉鬘・3・三二〇頁)

源氏は「母親(≡夕顔)が素直だったので、あなたの氣立ても  
安心できる」と夕顔の話題を出して世話を頼んでいる。この言  
葉から、花散里と夕顔には重なる部分があったと考えられる。  
少なくとも、源氏はそのように感じていた。

なぜ、花散里は、六条院〈夏〉の町に住むことになったのか。  
それは、彼女が、六条院完成時において、夕顔の「身代わり」  
となるべき唯一の女性であったからである。当時、源氏は、昔  
の恋人で今は亡き夕顔が忘れられずにいた。もはや共に住むこ  
とはできないとわかっていながらも、源氏は六条院に夕顔の居  
場所を作った。その場所こそ〈夏〉の町である。夏の町を作っ

『源氏物語』六条院に住む女性たち―花散里と〈夏〉の町をつなぐもの―(葛西)

た源氏は、入ることの叶わない夕顔の影を背負う人物を探し、  
その人物をこの町に入れることで、暗に、叶わなかった夕顔と  
の暮らしを実現させようとしていたのであった。もし仮に、こ  
の時、玉鬘が発見されていたのであれば、源氏は、当然夕顔の  
娘である玉鬘を「身代わり」として〈夏〉の町に住まわせてい  
たに違いない。しかし、彼女が発見されたのは、六条院完成以  
後のことであつた。つまり、花散里は、六条院完成時において、  
たった一人の夕顔の「身代わり」であつたのである。だからこ  
そ、花散里は〈夏〉の町に移住することとなつた。これが本論  
の結論である。

六条院〈夏〉の町に移り住む女性は、すべて夕顔の影を背  
負つた女性たちであつた。この結論は、図らずも、第一節で述  
べた、もう一つの問題をも解決するものとなるだろう。なぜ、  
六条院に住まわされたのが他でもない花散里であり、二条東院  
に住まわされたのが末摘花であつたのかという問題である。

この問題は末摘花巻を読むことによって解決する。

思へどもなほ飽かざりし夕顔の露におくれしこちを、  
年月経れど、おほし忘れず、……

(末摘花・1・二四五頁)

末摘花巻は、はかなく亡くなつてしまつた夕顔を忘れることが  
できない源氏の姿を描くところから始まつている。その後、源

氏は、ある女君の噂を聞いて興味を示す。彼女に夕顔の面影を求めて、期待してこの女君のもとへ通ったが、彼女は容貌がひどく、源氏への対応も未熟であった。源氏は落胆したが、自分のほかに誰が彼女の面倒を見るのだ、と思い実用的な援助を始めることになる。しかし、その厄介な性質で源氏を幾度となく辟易させた。この女君こそ末摘花であった。期待を裏切られた源氏は「なほ思ふにかなひがたき世にこそ（『夕顔のような女性はいないものだ』）（末摘花・1・二六三頁）と悲観している。このことからわかるように、末摘花は夕顔の「身代わり」になりえなかった女性であった。だからこそ、末摘花は《夏》の町ではなく、二条東院に留まり続けることとなったのである。

#### 四 おわりに

ここまで、花散里が六条院に移住したことについて、なぜ六条院の中でも《夏》の町であったのか、なぜ移住したのが花散里であったのか、という二つの問題について考察してきた。

何度も繰り返すように、本来六条院の《夏》の町に住むべきは、夕顔であった。その場所に花散里や玉壘が移り住むのは、あくまでも夕顔の「身代わり」としてであり、それ以上の意味はない。つまり、《夏》の町に住むか否かという問題は、「夕顔

の影を背負っていたか、否か」という一点に還元されるものであったのである。

なお、夕顔の「身代わり」として生き続けてきた花散里は、光源氏の死後、六条院を去ることとなる。

さまざまつどひたまへりし御方々（『源氏の妻妾たち』、泣く泣くつひにおはすべき住処どもに、皆おのおのうつろひたまひしに、花散里と聞こえしは、東の院をぞ、御処分所にてわたりたまひにける。（匂兵部卿・6・二六三頁）

源氏が生きていたころ《夏》の町に住んでいた花散里は、様々な妻妾たちと同じく六条院を去り、源氏からの遺産として与えられた二条東院へと戻っていくこととなる。源氏のいない六条院には、しかも夕顔の「身代わり」として移住させられたに過ぎない《夏》の町には、もはや花散里の存在は不要なのである。六条院での「身代わり」という役割を全うした花散里は、本来自分がいるべき場所である二条東院へ帰っていき、再び「心苦しき人」として暮らすのである。

※引用の本文は『新潮日本古典集成』による。なお、引用本文中の（ ）内の注記や傍線等はすべて私に付したものである。

注

一 上坂信男「花散里序説―末摘花から花散里へ―」（『中古文学』6、一九七〇・九）

二 林田孝和「源氏物語の醜女―末摘花・花散里の場合―」（『源氏物語の精神史研究』桜楓社、一九九三）

三 蛭澤隆司「心苦しき人々の在処―二条東院構想と女性達―」（『帯広大谷短期大学紀要』24、一九八七・三）

四 六条院における四つの町（『春・夏・秋・冬』と女主人（『紫上・花散里・秋好中宮・明石君』の配置の問題に関しては、先に挙げた姥澤論文のみに限らず、各女主人が描き出されている季節という観点から捉えるのが通説であるようである。例えば、近年発表された論考の一例を挙げると、

西野入篤男「六条院の秩序形成―割り振られた季節と春秋争い」（『明治大学大学院文学研究論集』24、二〇〇六・二）がある。

なお、西野入氏によってまとめられた研究史並びに考察を一読して明らかのように、本稿が問題とする「花散里―〈夏〉の町」については、源氏研究において既に解決済みの事項として処理されている。

## 五 前掲注一論文

（かつさい えり）

【編輯委員会注】本論文は、平成二十三年度皇學館大学人文學會奨励賞受賞論文である。

『源氏物語』六条院に住む女性たち―花散里と〈夏〉の町をつなぐもの―（葛西）